

Title	一九九三年度修士論文要旨；一九九三年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1994
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.63, No.4 (1994. 8) ,p.101(447)- 114(460)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19940800-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九九三年度修士論文要旨

〔日本史学専攻〕

「室町時代公武関係の一考察

——將軍の出行から——

原麗子

本論文では、室町幕府の將軍や將軍職経験者の出行の折の公家の扈從の検討から、当該期における公家層の、將軍・將軍経験者に対する從屬の過程とその詳細を扱った。

歴代室町將軍の石清水八幡宮參詣をおつてゆくと、足利直義・尊氏期から三代義満期の前半（一三七五年）まで、行列は武家によってのみ構成されている。義満期の後半（一三八六年）からは、公家扈從が多数を占める行粧に切りかわり、以後將軍參詣の最後となった足利義政期までそのやり方が繼承された。

足利義満の行粧への公家の扈從は、石清水八幡宮以外にも視野を広げてみれば、一三七九年の義満の任右近衛大将拜賀の時に初めてみられる。この後、將軍・同経験者への公家の扈從が通例となるが、扈從することはそれを命じる者に対する從屬の表明である。

当時の公家、三条公忠の記録『後愚昧記』には、息子実冬が義満に扈從したり、車簾役をつとめたりせざるをえなかった事に対する複雑な感情が記されており、義満が公家を扈從させはじめた事に対する公家界の反応の一面を知ることができる。

このような公家による扈從は、室町幕府に様々な面で依存する體質を備えた公家の從屬面が、表面にあらわに示された出来事であった。このような普通の公武の関係も、將軍と公家の間に從屬的人間関係を形成する上で重要な役割を果していたと思われる。

室町將軍・同経験者に対しては、公家層総ぐるみの從屬がみられる。だがその中でも、婚姻関係による特別な結びつきである「御親類」や、特に親密度の高い「堅固昵近輩」といった、將軍近臣の核となる存在があり、將軍の出陣に際して軍装して供奉し、また武芸に励む公家をも生み出したのであった。

「中世後期における対外交流と禪宗」

伊藤幸司

本修士論の視点は、中世対外関係史に中世禪宗史の観点を持ち込むことである。言い換えれば、禪宗からの視座による対外関係史といってもよい。従来、当該期の対外交流を説明する際、室町幕府との絡みから外交機関としての五山の存在及び重要性が注目されてきている。しかし、反面、当該期の対外交流に関わる禪宗勢力として、余りにも五山のみが視点が集約している

ともいえる。つまり、実際には当該期の対外外交の対外交流の全ての様相を五山のみを枠組みで説明することは不十分であり、実体はより多様な禅宗勢力が関わっていたとするのが妥当といえる。

また、ここで提示した視点を活かして行くためには、中世の禅宗社会の実体を正確に把握しておく必要がある。中世禅宗社会は、近世以降のそれとは異なり、その教団の形成は未成立、未成熟の状態で、各々の禅宗勢力の性格は門派という単位によつて形成されていた。いわば、中世の禅宗社会は各門派の集合体であつたといえる。ゆえに、中世禅宗史は門派単位の考察が不可欠となつてくる。しかし、当該期の対外交流に関わる禅宗勢力の考察において、この門派からの視点は従来それほど反映されていない。

そこで本修士論文では、特に五山の中に位置付けられながらも独自の性格も有し続けた東福寺聖一派と、林下に位置した大徳寺大応派という両門派勢力と対外交流との関わりに付いて考察した。両門派は商人との結び付きがよく確認されるが、ここでは特に対外交流を担っていた代表的商人として堺と博多のそれを考慮に入れた。まさに、当該期の両都市は対外交流の一大拠点とした君臨していたことは周知の事実であろう。さらに、当該期の対外交流を考察する際、大内氏の存在は欠かすことはできないが、その大内氏は堺や博多の商人、さらには領国内に展開している禅宗勢力を駆使し対外交流を行っている。しかし、その詳細な実体は明らかにされないままであつた。ゆえに、こ

ここでは「東福寺派」「大徳寺派」・「堺」「博多」・「大内氏」という五つのキーワードを念頭に置き、中世後期の対外交流の一端を解明すべく試みた。これらのキーワードは一見、統一性が無いように思われるが、しかし対外交流という場において密接に関わつてきてきているのである。そして、彼らの対外交流は、対明、対朝鮮、対琉球と多岐にわたっているが、本修士論文ではなるべく多彩な対外交流を考察すべく先のキーワードを基に意欲的に論を展開してみた。

「近代後期の庄屋の日常行動範囲」

——美濃国榎村榎橋家の事例——

伊藤 明

本論文では、近世後期における上層農民の日常生活を具体的に把握することにより、個人の行動を中心に地域社会の存在形態を考察することを目的としている。研究対象とした美濃国安八郡榎村(現、岐阜県輪之内町)の榎橋家は、近世期に同村の庄屋役を世襲した家柄である。同家に伝存する文書群の中には、文政二(一八一九)年から慶応三(一八六七)年にわたり、三代の当主によつて継続的に書き綴られた日記群が有る。そこに記された各筆者の外出行動を観察し、また相互比較を行うことにより、庄屋当主という特殊な事例ではあるが、それぞれの日常生活の諸相とその変化を窺い知ることができる。

外出行動の目的は多様だが、庄屋・家長・個人としての行動

という三つのレベルを設定することができる。一番目の庄屋としての公用が外出行動の中心であり、また、結果として日常生活の中に都市生活をもたらすことにもなっている。この目的の外出は年代による変化は少なく、家内での地位と役割分担がその行動様式を決めている。冠婚葬祭に関する外出は、主に二番目の家長としての行動に対応し、やはり家内での役割による違いが大きい。宗教行事への参加は、個人的な信仰という側面よりも、地域社会の結合への関与という面が重要である。この目的の外出は、年代が下がるに従ってその頻度、行動範囲が縮小する傾向が見られる。逆に、個人としての行動において、俳諧・華道等の文化活動を通じての近隣村々の上層農民との交流が活発に行われるようになる。これも、個人的な趣味の側面より、村役人を中心とする上層農民間の結合の強化としての面が重要である。

以上の観察結果から、近世後期の上層農民を中心に見た地域社会の姿は、行政的な村落組合としての形態と同時に、宗教的結合を含む自律的な社会結合が見られ、更に地方政治の運営主体としての上層農民間の、私的な交際関係が強化されつつある点が指摘できる。

「ペリー」来航前後における海防政策の展開

——阿部正弘政権の歴史的位置をめぐって——

松田隆行

明治維新史研究に関しては、膨大な研究史の蓄積がある。その多くは、明治維新の国内的な必然性の追求という形で行われてきた。その一方で、明治維新の国際的要因そのものの分析は十分であるとは言えない。国内的要因と国際的要因との間には、対外関係の変化という国際的な要因が内政の問題に転化し、また逆に、内政が対外関係を規定するという相互関係と不可分の統一が存在するから、この二つを統一的に把握する必要がある。そのためには、対外防衛問題である海防問題の意義を説明することが不可欠の作業となる。海防問題がいかに幕末史の展開を規定したのが解明されなければならない。

そこで、先ず、海防問題の実態を説明すべく、海防の中でも最も重要な江戸湾海防の最前線である三浦半島における海防政策の展開を考察した。そこにおいて明らかにしたことは、海防のための村方からの動員は、ペリー来航の時期において、その負担能力で対応できる限界を既に超えていたこと、村方は、負担の軽減および救済策の実施を求めた歎願書を藩に提出するとともに、領主の違いを根拠として負担の割り付けをめぐって村どうしで争っていたこと、また、海防の展開にもなつて生じてくる利権や需要に反応した村方の動きがあったこと、そして、

村方では海防負担をもっぱら自分たちの「百姓成立」をおびやかすものとして、あくまでも領主との関係で確認しており、ここからは直接的に對外的危機意識は出てこないこと、である。次に、海防政策の中でも特に重要な意味を持つペリー来航前後における異国船の取扱いの変遷について、海防の現場の実態や幕藩領主の認識、さらに幕府の威信の問題と関連づけて考察し、ペリー来航後に幕府が富国強兵政策へと転換するまでの過程を明らかにした。さらに、阿部正弘政権における「富国強兵」政策の特質について検討し、その「富国強兵」のための政策構想は、幕藩体制の枠組みと抵触せざるを得ない性格のものであったことを明らかにした。

〔東洋史学専攻〕

「トルコ・ヴェネツィア戦争」

浜田伴子

一四五三年、コンスタンティノープルの陥落のとき、古いものの象徴として倒れたのは、ビザンツ帝国だった。陥落のときまで、古い世界で最高の繁栄を築いていた、つまり最も上手にその体制に適応していたのが、ヴェネツィアだった。ヴェネツィアの強さの源は、東地中海交易を支えた黒海、さらにその黒海と地中海の入り口コンスタンティノープルを手にしたことにあつた。ヴェネツィアは、オスマン帝国にこれまで築いた商業的利権の確保を求めつつ、同盟相手を探し、ついにはオスマ

ン帝国に宣戦した。これが、第一次トルコ・ヴェネツィア戦争（二四六三—七九）である。その結果である一四七九年の講和条約は、ヴェネツィアという海上交易に生きる都市国家・経済大国と、対抗馬ジェノヴァによる東地中海・黒海支配体制の終わりを示している。

第三章では、ヴェネツィアが同盟国として期待したアク・コユル（白羊）朝のウズン・ハサンについて述べる。ヴェネツィアは、コンスタンティノープル陥落直後からウズンに接触を求めている。クイリーニ、ゼノ、コンタリーニ、バルバロなどの使節が元老院で選出され、派遣された。特に活発になったのは、トルコ・ヴェネツィア戦争が開始された一四六三年と、ゼノが大使として派遣されたときである。ゼノ、コンタリーニの旅行記のルート、時期、ウズンに対する反応の違いから、各時期におけるオスマン帝国の進出、ヴェネツィアのアク・コユル政策の変化を探る。

中世と近世の転換の象徴は一四五三年のコンスタンティノープルの陥落だが、実質的決着は第一次トルコ・ヴェネツィア戦争であるという結論に達した。

「イスラムの辺境・海港都市セウタ

——その景観と人々——

松井康子

セウタはアフリカ大陸の北西端に位置し、ジブラルタル海峡

に面した「港市」である。現在は、アフリカ大陸に属しながらスペイン領であり、モロッコとの返還問題によって知られる自由港だが、その成立は古くフェニキア人の時代にまで遡ることができる。その後、カルタゴ、ローマなどを経て都市に発展したが、特に十―十五世紀のイスラム期において最も発展した。また、イスラム期セウタは次の二点から重要だった。第一に、十世紀以降活発化したサハラ南縁地域とマグリブ地域を結ぶ西サハラ交易ルート、そしてアンダルス・マグリブ地域と東地中海地域―アラビア半島を結ぶ西地中海交易ルートの接点として未曾有の経済繁栄を築いたこと。第二に、とりわけキリスト教国によるレコンキスタの進展した十三世紀以降、それに対抗するイスラム側の軍事拠点としてイスラム世界の辺境に位置したことである。この二点からイスラム期セウタには、様々な独自性が見い出される。

中でも、内陸を支配した王朝との関係が興味深い。本論文では、具体的なイスラム期セウタ社会の状況について王朝との関係を軸に、その景観とそこで活躍した人々を取り上げ、考察を試みた。史料は、十五世紀に活躍したアンサーリーというセウタ住民が著した地誌 *Ihtisār al-Ahbār* とマリーン朝期の有力なセウタ住民についての人名録 *Bulgha* を中心に用いた。両者ともポルトガルによる占領直後に記されたイスラム期セウタの様子を伝える貴重な著書であり、そのうち *Bulgha* の方はおそらく初めて紹介されるものと思われる。その他、できる限り多くの地理書や人名録などを参照している。景観については、第

一章で地理的条件、生活基盤、建造物の状況といった様々な視点から考察し、そこで活躍した人々については、第二章でその出身地、遍歴地、職業から分析し、有力な住民を具体的に取り上げている。最後に、その両者からイスラム期セウタ社会の考察を試みている。

『西洋史学専攻』

『「奴隷」からアフリカ系「アメリカ市民」へ』

——解放民教育に見る黒人の自助・誇り・自己実現——

近嵐靖子

小論は、再建期南部において解放奴隷が展開した教育活動に、黒人解放のコンテクストからアプローチするものである。序章では、解放民教育研究史を跡づける。リヴィジョニスト（修正主義者）の研究では、解放民教育は北部白人がもたらしたのではなく、その起源が奴隷コミュニティにあったことが明らかにされている。

第一章では、北部白人が展開した教育活動を概観する。連邦政府による解放民管理局をはじめ、市民団体、宗教団体を中心となり、解放民援助協会を組織し、南部各地に解放民学校を開いた。北部白人の教育目的は、自由労働市場で生産者となりうる人材を養成することだった。そこでハンプトン・インスティテュートのような職業訓練校が数多く設立された。その反面、黒人にも高等教育に触れる機会を提供すべきだとする宗教団体

は、再建期の南部各地にハワード、フィスクなどの黒人大学も設立している。

第二章では、黒人たちが中心となって展開した教育活動に焦点を当てる。黒人は、教育が差別、抑圧、搾取に満ちた社会で自らを守り、真の解放を達成するために必須であると捉えていた。このような独自の教育観に基づき、北部白人の手が及ばないような地域でも解放民学校が組織された。特に白人の介入が最も少ないとされる黒人教会の学校では、自らの資金援助により学校教育を維持する必要性を自覚し、資金を工面しあつて運営を支えた。読み書きや聖書の教えに加えて、黒人としての誇りを高める教育が実践された点も特筆すべきであろう。

解放民にとつての教育は、彼らが「アメリカ市民」として生活するため、労働、参政、納税など実生活上で身を守るための手段であつたというだけでなく、「アメリカ黒人」として社会の抑圧から解放されるための手段でもあつた。

「第二次ベルリン危機とSPD

——デタント期における外交路線の「転換」——

内山 覚

SPD (ドイツ社会民主党) の外交政策の転換についての研究は旧来は、党が政府与党CDU/CSUの政策を認める形で西独の再軍備と西側軍事ブロック帰属を肯定する過程を考察するものであつたが、近年は、デタントを模索する当時の国際政

治を背景に、党がドイツ再統一政策最優先の方針を放棄して、東西ドイツ分断の現状の事実上の商人を前提にした緊張緩和政策に政策の重点を移したのだという観点を加えた研究が盛んである。

党のこのような「重点移行」は、一九五八年一月にソ連のフルシチョフのベルリン「最後通牒」(西ベルリンの「自由都市」化の要求。真の目的は東独の国際的承認と言われている)に始まる第二次ベルリン危機を契機に劇的に進展する。

ソ連提案に対して米・英は柔軟な態度を示し、東西ドイツ等の原則に基づいてドイツ再統一問題とベルリン問題を一括した処理を図るが、西独のアデナウアー首相は妥協を拒否したため孤立する。野党SPDは党内の強硬派の反対を抑えて、両問題の一括した解決を図る提案「ドイツ・プラン」を作成、五年三月に発表する。これは「兵力引き離し」構想に基づいて東西ドイツを対等に扱いながら旧連合国の合意と保証を条件に段階的に「再統一」を進める提案であつた。

だが草案作成中に党首オレンハウアーはフルシチョフとの会谈で、ソ連側にはドイツ再統一を認める意志がないことを知らされる。SPDはこれを機に外交政策を転換、力点を「再統一」から「緊張緩和」に移す。党は一年後に「プラン」を破棄する。西独のNATO帰属を積極的に肯定しながら、その枠組みの中で「プラン」の「核心理念」を生かしつつ軍縮とデタントを西側同盟国とともに追求する路線を採り始める。この「転換」が、六九年のSPD首班政権樹立とブランド首相の「東方

政策」として結実するのである。

「ルイ・アルチュセールのイデオロギー論

——社会の創出・形成・維持作用を中心に——

三穂野博彦

マルクス主義者としてのルイ・アルチュセールが投げ込まれたのは、スターリン主義と、それを克服しようとするサルトルらの理論的人間主義とが、認識の在り方をめぐって鋭く対立している知的状況であった。しかしその両者は、確実なるものを主体とするか客体とするかという違いはあっても、主体と客體とを分離し、一を他の反映と見做す二元論である点で同じ地平の上に立つ。これがデカルト以来の近代そのものであることは論を待たない。アルチュセールはこの主客二元論の内的構造を白日の下に晒した。すなわち彼は、こうした主体と客體とを所与の前提とする立場を廃し、二元論への最も根源的な挑戦者であるスピノザに依拠して、「唯一絶対の客観的リアリティー」という概念的に把握し尽くし得ぬ無限の多様性を想定すべきこと、ところが主体と客體とが構成される特定の空間が『常に既に』存在していること、その空間はイデオロギーの媒介によつてのみもたらされること」を明らかにしようとして試みた。

特定の空間、それはイデオロギーによつて具体的諸個人が主体へ、ナマの現実が社会的現実（客體）へと編成される空間である。主体と客體の総体が社会に他ならないから、すなわち

社会はイデオロギーによつて創出される。田中宏が「社会に充満するイデオロギー」と呼ぶものだ。しかし田中はアルチュセールの中に、これと相容れない伝統的な主客二元論と「表象としてイデオロギー」の色濃い残存を見て取る。唯一絶対の客観的リアリティーへのアルチュセールの強い拘りの故である。しかしイデオロギーの役割は、客観的リアリティー（具体的諸個人＋ナマの現実）を社会に編成することなので、イデオロギーの二つの性格は相容れないのではなく、互いに手を携えているのだと言えよう。

イデオロギーのこうした機能を明らかにし、それを具体的な社会分析へ応用したことは、アルチュセールの比類なき貢献である。

「民族考古学専攻」

「貝塚産ハマグリ」の成長線からみた採取季節と貝層形成

——茨城県上高津貝塚出土資料の分析——

真貝 理香

貝塚研究において、貝層の形成プロセス・堆積期間という問題は、遺跡を形成した人々の集落・人口規模、また遺跡の形成期間の双方と密接な関係があることから、古くから研究の対象であった。特に、日周期で形成される貝殻成長線を利用した貝層の堆積速度の研究方法が開発されてからは、従来の土器型式

を用いた堆積「期間」の研究からは推定し得なかつた短い時間幅の堆積の過程を捉えられるようになった。

しかし実際には、成長線を利用した分析の方法は、個々の貝が採取された季節を推定するには極めて有効だが、ある複数の個体が「同一年」に採取されたものかどうかを識別することはできないという問題があつた。そこで本稿では、茨城県上高津貝塚から出土した資料を用いて、成長線分析に加えて、ハマグリの「形態」および「大きさ」に関する分析を行うことによつて、季節査定の結果のみからは判断し得なかつた層位の堆積過程・廃棄のまとまりの問題を解決することを試みた。またさらに、成長線の詳細な観察や現生ハマグリの生態から、当時の人々のハマグリの採取域をも示唆する結果を導いた。貝類の採取域の問題は、縄文人の狩猟採取活動のテリトリー論の中で展開されることはあつたものの従来の成長線を用いた研究においては、あまり考察されることのなかつたテーマである。こうした形態や大きさの計測・観察・統計解析は、多量の個体に対して比較的容易に行うことができ、成長線分析を実施する一部の貝だけでなく、その母集団となつた貝全体の情報が得られる点においても、有効な分析方法といえる。ハマグリは貝塚構成遺物の中では最も一般的な二枚貝であり、本稿で示した手法は、今後、他の遺跡においても同様に展開されることが期待される。

「頁岩製石器の光沢

——山形県お仲間林遺跡出土資料の分析を中心に——

岡沢祥子

石器の使用実験を行つたり、表面に残された微細な痕跡を観察したりすることは、石器の機能を知る上で最も重要な研究方法である。石器に生じる痕跡にはいくつ種類があるが、中でも光沢は、微細剝離や線状痕以上に被加工物の特徴を反映し、且つ石器製作時などにおいて偶然的に生じることのない痕跡として、現在特に関心を集めている。

修士論文においては、岩宿時代の遺跡である山形県お仲間林遺跡から出土した頁岩製石器の表面に認められる「光沢」に注目し、それらの性格を明らかにすることを目的に、個別資料を対象にした肉眼観察および出土状況や頁岩の物理的性質に焦点をあて、定量的な分析を行つた。その結果、本遺跡の頁岩製石器の「光沢」は、道具としての属性よりもむしろ岩石の物理的な属性に左右されており、人間の規則的且つ継続的な作業によつて得られた痕跡とは考えにくいのであることが明らかとなつた。以下にその論拠を記す。

①「光沢」の出現部位・光り方は、器種を問わず極めてランダムな出現傾向を示す。

②「光沢」を有する石器の遺跡内での平面および垂直分布上の出現率は一定であり、特別な場の存在は認められない。

③ 表面積の広い石器・打断面の表面状態が緻密な石器ほど「光沢」の出現率が高い。

④ 同一水系内にある性格を異にする二遺跡の頁岩製石器においても、本遺跡の場合と同様の分析結果が得られた。

頁岩製石器の表面に生じる光沢には、使用痕以外に非人為的な表面変化があり、これらは高頻度且つ普遍的なものである。よって、石器表面の微細な痕跡を追う使用痕分析を行う際には、その遺跡の資料で分析を行うことの有効性と危険性を認識するためにも、先ずもって遺跡資料を十分に吟味すべきである。

一九九三年度卒業論文題目

〔日本史学専攻〕

加耶をめぐる日韓関係

古代曆制の意義

『続日本紀』にみる賑給記事の検討

伊勢神宮の創祀及びその背景

長屋王家木簡から見た長屋王像の再検討

平安時代の検非違使について

室町時代後期の剣道

鎌倉時代の検断沙汰について

戦国大名毛利氏の井上衆誅伐について

蓮如と一向一揆

関東申次について

江戸時代の食文化

津輕藩の都市税

―地子(人足役)を中心として―

明治の教育制度

―とくに日本歴史教科書を中心に―

肥前大村藩「郡崩れ」について

戦国時代武家女性の地位についての考察

刈敷農業の進展と近世村落

―岡山藩を中心として―

江戸時代の人々と髪

將軍の御成―家光・綱吉の御成と大名の負担―

近世障害者の実態

徳富蘇峰の平民主義と「強い国家」

大衆文化に見る日本人の意識の変遷

十五年戦争時のラジオ放送と世論操作

明治期の教育のひとつの取り上げ方

―「学制」受容をめぐる―

在郷軍人会に関する一考察

―その設立過程と社会的意義―

「最後の元老」西園寺公望の評価に関する一考察

近代及び(KIN-DAI)の起源について

長州藩内クーデタにおける高杉晋作と諸隊

土地制度の変遷と日本社会の変化

―一九三〇年代から第二次大戦後にかけて―

日立鉱山煙害事件について

日本鋼管訴訟

電波監理委員会のテレビ免許に関する措置の歴史的意義

三輪田 亮

正田 紀子

本田 美香

山本 拓司

朝比奈雄尚

大石 邦彦

大堀伸一郎

桑本 茂樹

坂本真由美

鈴木 健司

高橋 雅仁

玉生真紀乃

中村 貴之

渡辺 清治

林 涉和子

小西 弘通

鈴木 宏英

田畑 淑

浜野とも子

磯田 道史

〔東洋史学専攻〕

イスラーム世界におけるヴェールのゆくえ

イスラーム世界におけるジン観

中世イスラーム世界の地図と世界観

小林 明子

戸谷 恭子

酒谷 澄子

イスラーム・イメージへの挑戦

西田 大輔

ベトナムの言語選択

仙波 広雄

東アフリカにおけるインド系住民の研究

江口 陽子

—フランス統治下の言語・文字政策—

北村 史恵

エジプト経済自立化の試みと挫折

澁佐 直子

政治家としての王義之—書簡を中心として—

中瀬古亮治

—ミスル銀行を中心として—

澁佐 直子

孫呉の江南開発

石黒 正隆

地中海商船の形態的発達に見る社会経済状況の変容

鮫島 淳子

公孫民政権の興亡と中国王朝との関係について

石黒 正隆

マムルーク朝支配下のシリア辺境とトルクメン

小野原和江

後金国における君主とアンバンの関係

吉村 剛

トルコにおけるコーヒー文化史

鈴木亜矢子

イスラムと社会主義の共生

山田 尚美

〔西洋史学専攻〕

長田 純一

イスファハーンは世界の半分

唐澤 華絵

使徒戒儀とアンティオキア事件

高橋 大海

地方自治体エルサレムの変容

星野 堂夫

農民戦争について

能瀬美樹子

—イギリス委任統治期を中心に—

佐藤 薫

西洋中世の音楽観

清水 詠希

二〇世紀マラヤにおけるイスラム宗教運動の潮流

十倉 琢

ピューリタン革命とその思想

横畑由希子

シオニズムとインド系ユダヤ人

福島 浩之

フリードリヒ二世のシチリア王国

山内 正博

—ベネ・イスラエルの移民をめぐって—

土田 亨子

フリードリヒ一世の帝国国制改編とその理念

田代 修

二・二八事件の背景

中瀬 英明

第一回十字軍運動の原因

久我 佳子

—台湾人意識と国民党の暴虐を中心に—

久我 佳子

ニユルンベルク裁判考

久我 佳子

伝統中国における同族結合のあり方について

久我 佳子

中世的世界像から近代的の世界像へ

久我 佳子

抗日根拠地経済建設に関する一考察

久我 佳子

中世的世界像から近代的の世界像へ

久我 佳子

—華北における日本軍との対抗関係を中心に—

久我 佳子

—イタリア・ルネッサンスの一考察—

久我 佳子

—華北における日本軍との対抗関係を中心に—

久我 佳子

—イタリア・ルネッサンスの一考察—

久我 佳子

—華北における日本軍との対抗関係を中心に—

久我 佳子

—イタリア・ルネッサンスの一考察—

久我 佳子

—華北における日本軍との対抗関係を中心に—

久我 佳子

—イタリア・ルネッサンスの一考察—

久我 佳子

—華北における日本軍との対抗関係を中心に—

久我 佳子

—イタリア・ルネッサンスの一考察—

久我 佳子

—華北における日本軍との対抗関係を中心に—

久我 佳子

—イタリア・ルネッサンスの一考察—

久我 佳子

西ドイツ型福祉国家—その歴史と現在—

ドイツ国内諸勢力と普墺戦争

モンテスキューの政治思想の現代的意義

アメリカは何故広告王国になったのか

プロイセン憲法争議

ユダヤ人—シオニズムへの道

ウィーン体制の成立と崩壊

十九世紀におけるユダヤ人の思想的・精神的変化

—ハスカラーからシオニズムまで—

ドイツ表現主義絵画とナチス

体制に浸透するマフィア史

南北戦争前のアメリカ合衆国

—ナシヨナリズムからセクシヨナリズムへ—

第二帝政期ドイツの中央党における政策転換

ドイツ社会民主党とヨーロッパ統合

中産階級とパブリック・スクール

—ヴィクトリアン・ジェントルマンの一考察—小林 裕昭

看護改革におけるフロレンス・ナイチンゲールの意義

松野 大海

イギリスの工業化と労働・余暇

—十八世紀後半から十九世紀における

「聖月曜日」との関連において—

神野 敬

満州事変勃発後の対日論調

—一九三一年九月—一九三三年三月、

英 The Times と米 The New York Times より—高橋 雅暢

“Bloch, M. Les Rois thaumaturges, 1924”にみる

Bloch 心性史の基本的性格 浅川 範之

フランスにおける子どもへのまなざし

—フランス近代における子ども期誕生と

社会環境の変化を考える— 村田 映子

十七世紀におけるスパイスの凋落

—その過程と諸要因について— 小高由紀子

十七・八世紀ラングドック毛織物工業

—その繁栄と「工業化挫折」との関係— 名取 絵理

ヨーロッパにおける近代家族の絆

—アンシアン・レジーム期を中心として— 星 敦子

貴族の世界

—近代英仏貴族の基本的性格とその相違の諸要素—

黒田 律子

カステイリヤとカタルーニヤ

—スペイン帝国における中央部と沿岸部

との比較からの一考察— 石原 一章

フランスにおける古代エジプト像の変遷

フランス近代の社会における女性たち 金子 泰子

—女性をとりまく環境の変化— 矢部 淳子

大覚醒とアメリカ独立革命—宗教と政治の関わり—林 克明

「アメリカ人」としてのアイデンティティー

—北アメリカ植民地におけるイギリス本国

への憧憬とイクセプションリズム—

アメリカ独立革命における千年王国思想の意義

—宗教的思想から政治的思想への転換—

「明白な運命」

—アメリカ人の文明観とインディアン政策—

アメリカ西部における英雄の存在とその誕生要因

カーネギーにみるアメリカの夢

—ソーシャル・ダーウイニズムの影響力—

アメリカ女性参政権運動—組織と対立—

在米日本人社会主義者と「幻想の共同体」としての日本

アメリカ・ユダヤ教改革派とシオニズム

アメリカ外交における孤立主義から国際主義への

変化の意義—世界システム論の視点から—

富岡 直樹

山田 真也

齋藤 洋史

小笠原 亮

宮坂 清

相良 玲子

塩崎淳一郎

後上 雅士

奈良 貴司

石川 清史

石川 茂樹

磯田 和秀

内沢 賢彦

ポリネシアの現地人牧師

—ラロトンガ島民マレットウの場合—

ブルースの成立に関する一考察—チャーリー・

バットンのライフヒストリーを通じて—

「疱瘡神説」にもとづく『酒吞童子伝説』の舞台変遷

亀ヶ岡式土偶の眼部について

イングリッドにおける工業化によるハブの変化

縄文時代の土製耳飾

日本における化粧について

—禁令からみた江戸時代の化粧と装い—

インカ帝国における道路とその社会的意義

チチェン・イツツアにおけるマヤと非マヤ

—メキシカナイズド・マヤとマヤナイズド・

メキシカンの検証から—

トンガにおけるハトの狩猟について

祭の中の村とムラ

—神奈川県藤沢市遠藤地区の事例から—

前二一〇〇年頃のカデシュの戦いについて

古代オリエントの戦車の運用について

槃瓠神話をめぐる考察—槃瓠神話の研究史—

縄文時代における焼骨出土に関する考察

社会現象としての騎馬民族説—その社会への受容—

大石 徹

大山 昌彦

神内 伸浩

木村 歩

斉藤 清

佐藤 浩子

篠田 容子

五月女清彦

菅 圭介

高橋 英輔

瀧上 清隆

田中 信彦

千室絵里子

長沢 洋子

知行

中世平瓦凸面に残る叩目痕について

— 関東二地域間の比較 —

橋場 君男

韓国新安沈没船遺物にみる十四世紀日元貿易形態の一考察

宮田絵津子

インダス文明における火の崇拜の研究 — ロータルと

カーリーバンガンの比較において —

森 裕子

申命記法とヨシア時代

柳沢 健一

スキタイ文化におけるグリフィン図像の変遷

— 闘争文の展開とその背景 —

山田 真弓

岩宿時代における石器石材の選択

— 山形県お仲間林遺跡を例として —

渡辺 丈彦